

市川レポート (No.11)

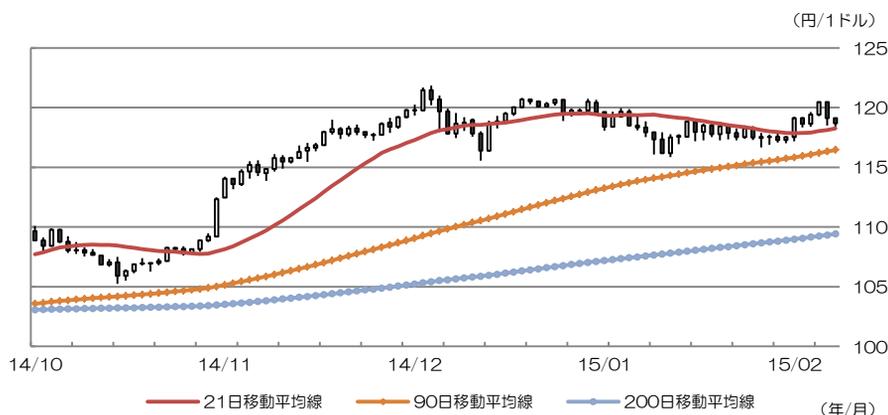
ドル円相場を取り巻く材料の整理 (その3)

前回のレポート「ドル円相場を取り巻く材料の整理 (その2)」では、通貨先物取引の投機筋ポジションや、通貨オプション市場におけるリスク・リバーサル動きを通じて、市場参加者の取引動向を確認しました。簡単にまとめますと、投機筋は足元で円売りよりもユーロ売りや豪ドル売りを選好しており、これはドル円相場の動意が乏しい理由の1つと考えられます。またドル円のリスク・リバーサルをみる限り、オプション市場の参加者はドル安円高を見込む向きの方がやや多い状況にあり、これがドル円の上値の重さにいくらか影響している可能性があります。

移動平均線がドル円の短期的な下値目途として意識される可能性

今回は代表的なチャート分析を使ってドル円相場を展望します。なおチャートの詳細な説明は本文の最後に記載しましたのでご参照下さい。まず移動平均線の動きから確認します (図表1)。2月13日時点で21日線は118円25銭付近、90日線は116円45銭付近、200日線は109円42銭付近に位置しています。ドル円はこれらの移動平均線の上に位置しているため、まだ上昇局面にあると解釈することができます。今後、ドル円が下落した場合は、各移動平均線が下値支持線 (サポートライン) として作用し、それぞれの位置する水準がドル円の短期的な下値目途として意識される可能性があります。

【図表1：ドル円の移動平均線】



(注) データ期間は2014年10月1日から2015年2月13日。
 (出所) Bloomberg L.P.のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

一目均衡表からのサインは強弱まちまち

次に一目均衡表をみてみると、強弱まちまちなサインが出ています（図表2）。ローソク足が雲を上抜ければ相場は上昇局面にあると判断できますが、2月13日時点で雲の中に下がってきているため、やや注意が必要です。また転換線は基準線を上抜けているため、上昇局面を示唆していますが、遅行線は日足と重なっており特に方向性は示されていません。明確な買いシグナルとなる「三役好転」（①ローソク足が雲を上抜ける、②転換線が基準線を上抜ける、③遅行線がローソク足を上抜ける）には、少なくともドル円が120円台をしっかりと回復する必要があります。なお今月下旬には雲のねじれが生じており、相場のトレンドが変化する可能性もあるため、注目しておきたいと思います。

【図表2：ドル円の一目均衡表】



(注) データ期間は2014年10月1日から2015年2月13日。
 (出所) Bloomberg L.P.のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

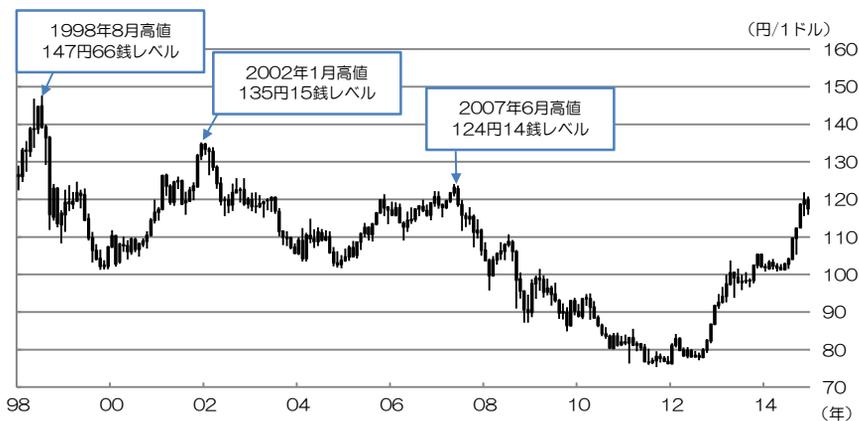
移動平均線と一目均衡表をみる限り、総じてドル円の上昇トレンドは継続しているものの、足もとで上昇の勢いはやや鈍ってきていると思われます。そのためドル円の下げが目立ってきた場合は、その都度、移動平均線の水準や一目均衡表の形状をみて、下値の目途を確認しておく方が良いと思います。なおチャート分析はこのほかにも様々な手法があり、相場のトレンドを判断する場合にはパラボリック・システムやポイント・アンド・フィギュア、相場の過熱感を判断する場合にはボリンジャー・バンドや相対力指数 (Relative Strength Index、RSI) などがよく使われます。複数のチャートを用いて相場の動きをみていくことも大切です。

目先はレンジ推移継続も、反転上昇の場合は2007年6月高値が戻りの目途か

さて、これまで3回にわたってドル円相場を取り巻く材料を整理してきましたが、基本的に日米金融政策の方向性の違いがドル高円安要因との見方に変わりはありません。ただ世界的に金融緩和の動きが広がるなかで日銀の追加緩和に対する市場の関心が薄れていることや、1月27日の甘利明経済再生相発言（2%の物価目標について厳格な期限ということ政府も日銀もコミットしているわけではない）に加え、2月12日の一部報道（一段の追加緩和は日本経済にとって逆効果になるとの見方が日銀内で浮上している）も、円売りを抑制する方向に作用しているようです。

チャート分析からもドル円の下方向リスクが少しずつ示唆されるなか、概ね115円から120円というレンジ推移はしばらく続く可能性があります。しかしながら米国の強い経済指標や金利上昇には素直にドル高で反応する地合いは続いていることから、当面は米国の経済指標や金融政策を巡る思惑がドル円相場の方向性に大きな影響を与えると思われます。なおドル円が大きく反転上昇した場合は、直近の高値が目安として意識されやすくなりますので、図表3にチャートポイントと目されるドル円の高値を記しておきました。ドル円は金融危機前の2007年6月に124円14銭レベルの高値をつけていますので、この水準がとりあえずの戻りの目途となりそうです。

【図表3：ドル円が過去につけた高値水準】



(注) データ期間は1998年2月から2015年1月。
 (出所) Bloomberg L.P.のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

【参考】

ローソク足チャート

始値、高値、安値、終値の4本値を使用し、ローソクの形に表したチャートです。1日の値動きを表したものを「日足」、1週間は「週足」、1カ月は「月足」といいます。始値よりも終値の方が高いものを「陽線」といって白抜きで表し、始値よりも終値の方が安いものを「陰線」といって黒塗りで表します。一般に、陽線が連続する場合、相場は上昇傾向にあり、陰線が連続する場合は下降傾向にあると解釈されます。また高値と安値は上下に突き出した「ヒゲ」と呼ばれる線で表します。一般に、下降相場で下に長く伸びたヒゲが出現した場合や、上昇相場で上に長く伸びたヒゲが出現した場合は、トレンドの反転と解釈されます。このほかにもローソク足の形状や組み合わせにより、様々なパターンが存在します。

移動平均線

当日から遡った一定期間における移動平均値を結んだ線のことで、相場のトレンドを分析する代表的な手法です。日足チャートでは5日線、21日線、90日線、200日線等がよく用いられます。移動平均線は一般に、ローソク足との関係で売り買いを判断する際、下値支持線（サポートライン）や上値抵抗線（レジスタンスライン）として参照されます。

一目均衡表

ローソク足と5つの線からなるチャートで、それらの位置関係を基に、特定の時間枠の中での相場の動きとその中心価格を考慮して、将来の値動きを予測する手法です。5つの線は、①基準線（過去26日間の最高値と最安値を足して2で割ったもの）、②転換線（過去9日間の最高値と最安値を足して2で割ったもの）、③先行スパン1（基準線と転換線を足して2で割り26日先にずらしたもの）、④先行スパン2（過去52日間の最高値と最安値を足して2で割り26日先にずらしたもの）、⑤遅行線（終値を26日前にずらしたもの）で、先行スパン1と2で囲まれた部分を「雲」といいます。

- 当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものであり、投資勧誘を目的として作成されたもの又は金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。
- 当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。
- 当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。
- 当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。
- 当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。
- 本資料の内容に関する一切の権利は当社にあります。本資料を投資の目的に使用したり、承認なく複製又は第三者への開示等を行うことを厳に禁じます。
- この資料の内容は、当社が行う投資信託および投資顧問契約における運用指図、投資判断とは異なることがありますので、ご了解下さい。

三井住友アセットマネジメント株式会社

金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第399号

加入協会：一般社団法人投資信託協会、一般社団法人日本投資顧問業協会、一般社団法人第二種金融商品取引業協会